

12/23(木) カトマンズ空港到着。

交通量の多さに戸惑いながらホテルに到着。

夕食まで時間がある。佐々木会長はガソリン臭と悪路と睡眠不足でダウンしているので、一人トリブバン大学教育病院に向かう。

1987 年から 1991 年まで JICA で赴任したトリブバン大学教育病院。夕方であったが、誰かいるかもしれないという淡い期待は、見事にはずれスタッフは誰もいなかった。新しく出来た基礎棟、隣のカンチ小児病院を外から見て回った。

ネパールでは 1973 年から一般医を養成するシステムはできたが、教育年限の関係からインド医学協議会では医師とは認めていなかった。JICA は「トリブバン大学医学教育プロジェクト」を立ち上げ、ネパール唯一の大学病院の建設を 1980 年に一から始めた。最初は日本から短期の技術者の派遣、あるいは日本への技術員の派遣も活発に行われていたが、現地での長期滞在者は赴任当初は調整員の寺崎さんと二人と心細い限りであった。1989 年より 5 年間のプロジェクト方式技術協力「医療教育プロジェクト」が開始し、プロジェクトリーダー、医師、看護婦など長期派遣者が増えたことから、本格的な援助が始まった。本プロジェクトは、基礎医学部門の強化を通じて、卒業生が国際的に認知されること、各臨床部門間との連携を強化して臨床機能を強化することを目的とし、結果として成功プロジェクトの一つとされている。

一方、その当時のトリブバン大学は民主化の学生運動の拠点の一つでもあり、機動隊が時々玄関あたりまで来て衝突していた。マオイストの勢力はまだ小さく、 kongress 党が頑張っていて、地方よりカトマンズとその近郊都市が主な民主化運動の場だった。王族ファミリーの権益独占を排除し、民主化になればネパールの未来は明るいという活動家の誰もが思っていた。1990 年 4 月、デモへの発砲から最初の外出禁止令の後、民主化というパンドラの箱が開いた。その時は、その後ナラヤンヒティ王宮で王族が殺害され、マオイストと 10 年間で内戦することになるとは思っていなかった。誰も。



トリブバン大学教育病院玄関口

12/24(金)

ゼネストとのことで朝から車が走っていない。出発まで、ホテルの周りを散策ついでに、昔住んでいた家を探す。つたない記憶もあるが、周辺に家が増えている。迷った末なんとか見つけた。家は改装中で誰も住んでいなかったが。そのままだった。



セブンイレブン？



菩提樹です。三叉路に目印、休憩所としてあります。



機動隊の皆さん、ゼネストなので、警戒にあたっています。今はお茶やで休憩中。  
昔は竹のプロテクターだったので、石が飛んできて怖かったのですが、大分服装が良くなっています。

ボダナートを見学



ボダナートは、高さ約 36m のネパール最大のチベット仏教の巨大仏塔（ストゥーパ）である。中心にはお釈迦様のお骨（仏舎利）が埋められている。チベット仏教の聖地であり、周辺にはチベット難民が住んでいる。地方にも難民キャンプがあるが、カトマンズには約 2 万人のチベット難民がいる。

1951 年中国がチベットを軍事侵略後、今でも、年間数千人にもものぼる人々が中国を逃れ、ネパールへと亡命してくる。多くのチベット難民は一度ネパールへと逃れ、そこでチベット亡命政府の難民認定を受け、インドのダラムサラへと向う。

ヒマラヤを越えて逃れてくる難民の約半数は、子どもたちである。2007 年の亡命者 2337 人のうち 18 歳以下は 44.8%。彼らの両親は、「わが子にだけは、チベット人としての教育と自由を。」との思いから、少なからぬ金額を越境業者に支払い、子ども達を送り出す。だが、ヒマラヤ越境は簡単ではない。亡命者は国境警備が手薄になる厳冬期に集中するため、凍傷になり、手足の指を失う人、命を失う人もいる。越境を中国警察に見つかれば、収容所や刑務所に数週間から数ヶ月の単位で収容される。収容期間中は、暴力や尋問など様々な形の脅迫や虐待が日常的に行われている。それだけの危険を冒してもなお、年間数千人のチベット人が中国から自由を求めて逃れてくる。

セルチャンというトリブバン大学教育病院の病理のチーフがいた。Sherchan と綴るので、セルチャンさんである。今回会うことが出来うれしかった。顔色が悪いのでどうしたかと聞くと、マラリア撲滅プロジェクトのリーダーをしているときに、マラリアに罹り、腎臓が壊れたため、インドで腎移植をしたとのことであった。やはりネパールは大変なところである。子供たちは既に大学を出ており、無理はする必要はないので、体を大事にして欲しい。彼はムスタン出身である。

ムスタン王国はネパールで唯一、高度な自治権が与えられていた。2008 年ネパール政府により藩王制廃止が決定されたことにより、ムスタン国王は退位、ムスタン王国は終焉を迎えた。現在はネパール連邦民主共和国ダウラギリ県ムスタン郡となっている。

言語はチベット語、宗教はチベット仏教である。1951 年チベットが中国の軍事侵略を受け、

チベットの伝統や文化が破壊されたため、世界で唯一「古き良きチベット」の原型を留めている。

近年マオイストが暴力で地方を征圧しているがムスタンはどうかときいたら、王への信頼が強いので、マオイストが来ても皆で追い出しているとのことで、安心した。マオイストが牛耳れば最後のチベット文化を破壊してしまうことは目に見えている。マオイストには文化がなく、あるのは殺戮と破壊のみ。

チベットが自由になることを願って、巨大なマニ車を回した。

## 12/26(日) タイ国際航空墜落事故の犠牲者を慰霊するメモリアルパーク

ライさんが運転する車で佐々木会長と三人でカトマンズから北へ約30km、標高2075mに位置するカカニへ2時間かけて行った。ここカカニには1992年のタイ国際航空墜落事故の犠牲者を慰霊するメモリアルパークがある。タイ航空は今でも管理費用を負担しており、きれいに掃除されていた。

1992年7月31日、タイ国際航空311便は、激しい雨に見舞われていたトリブバン国際空港への着陸をやり直そうとして北部の山間部に迷い込み、カトマンズの北北東約45Kmのスルヤクンド山麓のギョプテ山の中腹の岩壁(標高約3500m地点)に墜落した。この事故で邦人乗員1名、邦人乗客20名を含めた乗員14名、乗客99名、計113名全員が死亡した。当時トリブバン空港にはレーダー施設がなく、着陸の際には無線連絡と目視にのみ頼っていた。レーダー施設の設置工事はその後、1997年に日本の政府開発援助により行なわれている。

この事故により、兵庫医科大学中央検査部三村技師長夫妻、JICAネパール事務所の長友次長ご家族4名、現職隊員1名、その他大使館関係者など、多くの日本人関係者が亡くなられた。

毎回ホームステイ学生を受け入れていただいている、ガネシュは警察病院の部長であるが、1日にヘリで何回もカトマンズと事故現場を往復し、事故当時、遺体の回収作業に大変な努力をされた。本当にありがとう。

三村先生はトリブバン大学教育病院プロジェクトへ赴任に向かうところであったため、ネパールの土を踏むことはかなわなかったが、ここカカニ展望台のメモリアルパークからはアンナプルナ山群そしてガネス、ヒマルチュリ山々を近くに永遠に見ることが出来る場所に永眠された。

三村先生には卒業間近の3月になっても就職先が決まらないところを兵庫医大に拾っていただき、またアメリカから帰ってプータローのところをネパールを紹介していただくなど、節目でお世話になっていた。

三村先生のネパール赴任は私のトリブバン大学教育病院プロジェクト業務をさらに発展させることであったので、赴任前に私のやり残したことを伝えていた。いまでも、そのやりのこしたという気持ちが引っかかっている。



メモリアルパーク内石碑、全ての犠牲者の名前がプレートに刻まれている。



メモリアルパークから望むヒマラヤ山脈。

12/27(月) ドライバーを探して

ネパール滞在時に雇っていたドライバーはジュジュという名前である。カトマンズに古くから住むネパール系の名前であるので、もちろん「魔方陣グルグル」に出てきたり、JUJU として歌っているわけではない。

日本の駐在員は 3 年ぐらいで入れ替わるので、いつまでも日本人のドライバーしてるとも思えないが、手がかりとして JICA 事務所しかないので行ってみた。JICA 事務所は場所も変わって広々とした事務所になっていた。まずは青年協力隊の岡本調整員さんにご挨拶をして、地方隊員へのおみやげとして日本のお菓子と京都のふりかけ等を渡した後に、聞いてみたところ、次長のドライバーをしていた。

腹が大分出ていると言ったら、サーブも髪が薄くなったと言われた。変わりはなかった。

そして、携帯を取り出して一緒に働いていた家事働きのマンジュに連絡をとり、一緒に会うことになった。

ジュジュの運転する「HERO HONDA」(ホンダのインドでの合弁会社、二輪車)の後ろに乗って彼らの住む家に行った。渋滞を感じなくて、それなりに爽快。

カトマンズ市内ではあるが、20 年前はそのあたりはまだ田んぼがあり、ご両親が農業していて、それを一部売って 4 階建てを立てたという。2 階を人に貸し、ご両親、兄弟夫婦も共に住んで大家族であった。

その一室にマンジュがいた。彼女はその時代の一般的なネパール人として 15 歳で結婚し、2 児をもうけたが、何かの都合で一人放り出されてしまった。まだ若かったが、2 児をもうけたところで避妊手術をしていたため、再婚もかなわず、帰るところもない。教育も受けさせてもらっていないので資格もないから、私の所へ面接に来た。私としては初めての海外なのでメイドは英語か日本語が出来る人のほうがよかったのだが、性格が穏やかそうなので働いてもらったら、地頭が良くて呑み込みは早く、なによりネパール料理は本当にうまかった。学校行っていればなあといつも思っていた。外で部屋を借りるとお金が残らないというので、家の中の別室をあてて一緒に住んだ。

娘が出来たので、子守をしてもらった。娘は親より彼女になついで、今は忘れてしまったが、ネパール語は家族で一番良くできたそう。親に怒られたら彼女に甘えに行っていた。

今回話していると、そのころの娘の写真を出してきた。え、まだ持ってんの。私は渡したことも忘れていた。これを娘に返してくれと、その代わり今の娘の新しい写真が欲しい。家内に話すとまだ持ってたのかと涙ぐんでいた。でも、今の娘は眉毛がなくて、目の回り真っ黒、金髪のプリクラ写真ばかり。まともな顔のがない。

私たちの後は何軒か日本人の所で働いたが、今は職がないそう。同じ家だし、ジュジュと結婚したのかとも思っていたら、ジュジュの奥さんが挨拶に来た。この国は年金も無ければ社会保障もない。ジュジュは一生面倒見る気だなと思った。

なにはともあれ、みんな太って元気で暮らしているので安心。

12/28(火) ハチガンダ地区公立小学校・私立小学校 訪問

教室に入ると全員緊張しているのがわかる。

ここでは学級崩壊なんて無いんだと思う。高校出るまでに学校続けられるかという社会。引きこもりなんて存在しない社会。くじけずがんばって欲しい。

ライさんが今回の訪問客を紹介して、みんなに鉛筆を配り、教室の一番と二番に景品を渡す。

今の学生交換交流事業が始まる前、湊川の神戸大学でライさんが宇賀先生の部屋で研究していたとき、私は投稿論文の英語表現を直してもらうために、度々お邪魔していた。(おかげで学位が取れました)

どちらも忙しいので、休みの日に神戸大学の教室で会うことが多かった。暑いときは昼からビールを飲んでの雑談の中で、地域の小学校へ寄付をしているという話を聞いた。最初はダサインのお祭りで踊り子へ渡すお金をプールしていたのだが、ある年から踊り子を呼ばずに小学校に寄付しようということになった。闇雲に配るのではなくて、学校の勉強でがんばった子にあげるのだといていた。頑張る子供はもっと助けてあげる、だけど単なる物乞いの子供には何もあげない。

シバクチの技師学校の成績優秀者の学生に、三木東ロータリークラブの援助で奨学金が渡されることをライさんがまとめている。

今回訪問したハチガンダ地区公立小学校・私立小学校、ライさんの原点かなと勝手に理解している。このあたりは手伝うことが一杯ありそうだ。乾杯。



最後に

今回の訪問はタイムスリップでした。

最も印象に残ったものは、道路を多量に走る車であり、20年前は不可能に思えた近代的ビルが建築され、夜は暗く寂しい田舎であったところに住宅が立ち並び、私立学校の看板が目立っていた。昔は余った電気をインドに売っていたのが、逆転して電気が不足し毎日数時間以上の停電となっていた。カトマンズの人口は確実に増えて、物が増えているのは実感できた。滞在していたころはネパールの医師免許はインドでも認めてもらえないほどであったが、近年は医学、看護コース卒業後は海外で就職する人が多いという。

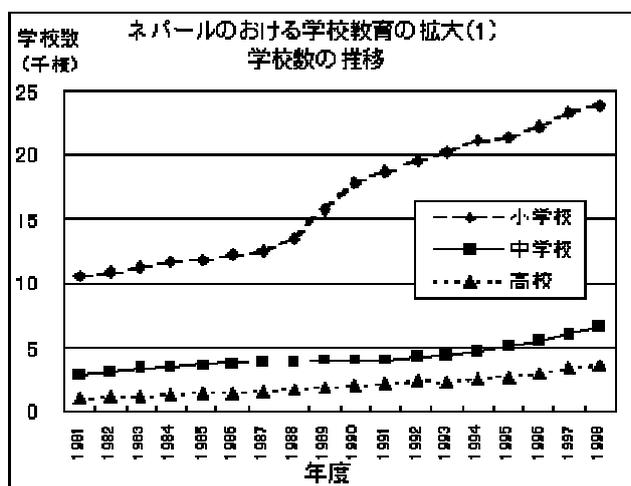
研修の合間をぬって、旧知の知人を探しまわった。携帯が行き渡っているので便利だ。会うたびに出されたものを食べていたら3kg太ってしまった。安くない給料で用意してくれているので、出されたものを残すわけにはいかない。皆、地方から学業成績優秀でカトマンズに来た勤勉な人達なので、息子や娘は残らず大学に行っていた。道路、電気、水道などのインフラは不十分であるが、各個人は家を新築、建て増しと暮らし向きは上がっているのが実感できた。私立学校が増えることで貧富の差が拡大しているという人もいるが、個人的にはここに、過去のネパールには無かった中産階級の増加と経済のレベルアップを感じる。

補足

## ネパールの教育事情

ネパールは2008年4月に制憲議会選挙が国際的支援の下実施され、連邦民主共和制への移行の宣言とともに、王制に幕を閉じました。1980年代より、民主化の流れに伴う政治体制の変革とともに教育体制も変化してきているので、諸々の情報が錯綜しており、今回収集した情報が必ずしも完璧とは言いがたいところがあるかもしれないが、要点を整理した。

ネパールにおいて近代の公教育制度が始まったのは1950年のラナ家専制時代の終焉後の翌1951年に教育省が設置されてからである。その後の学校教育の量的拡大は下図のごとく順調だったといえる。



(社)日本ネパール協会第26回ネパール研究会 ネパールのカースト/エスニック・グループとその教育問題

神戸大学大学院(社)日本ネパール協会理事 畠 博之 より抜粋

ネパールは国家開発計画の一環として、教育には力を入れている。小学校と中学校は義務教育ではないが、1977年に小学校教育無料制度を確立し、かつては小学校低学年のみであった教科書の無料配布も現在は小学校高学年の5年生にまで拡大した。1～5年の小学校では、全てユニセフからの援助で無料となっている。6～10年生は有料となり、買えない生徒は小学校で終わり、中学校への進学を断念している。

教育予算の大半は教師の給料となっている。学校設備にまで予算がほとんどないことから、学校を建てるのは地元の負担になります。村人が寄付を出し合ったり、労働奉仕をして学校を建てますが、近年海外のNGOにより学校が多く建てられている。昔は1村に1小学校であったが、今は1村に5小学校のところもある。

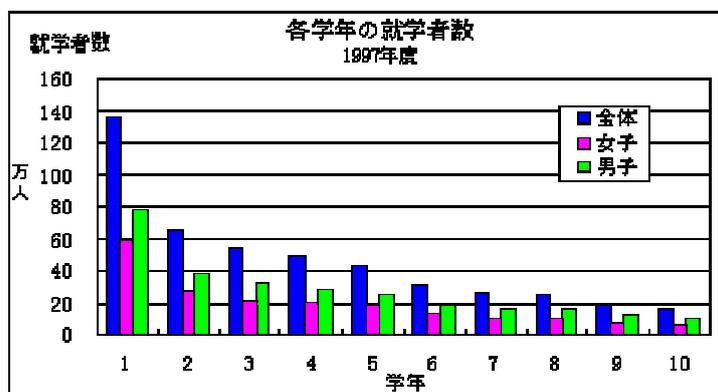
初等教育の粗就学率は 1990 年代に 100%を超えているが、純就学率は 69.6%ほどで、約 31%の児童が初等教育を受けていない。粗就学率が 100%を超えているのは、学齢に達せずにはまたは学齢を超えて在籍している生徒が多くいるからで、このことは 10 歳を超えてやっと小学校に行かせてもらった子どもや、留年を繰り返している子どもがいることを示している。基本的には中等教育まで一本の単線型の教育制度であるが、ネパール語を教授言語とし、ネパール政府の作った国定教科書に基づいて授業をする公立学校と、英語を教授言語とし、インドや欧米の教科書をもとにした英語教科書で授業をする私立学校がある。

#### ネパールの粗就学率と純就学率 1997 年度

就学率(%)	小学校 (初等教育)			中学校 (前期中等教育)			高校 (中期中等教育)		
	全体	女子	男子	全体	女子	男子	全体	女子	男子
粗就学率(%)	122.1	103.8	139.7	53.6	42.0	64.9	36.1	26.9	45.6
純就学率(%)	69.6	59.9	78.9	28.2	22.3	34.0	19.1	14.3	24.1

(社)日本ネパール協会第 26 回ネパール研究会 ネパールのカースト/エスニック・グループとその教育問題  
神戸大学大学院(社)日本ネパール協会理事 畠 博之 より抜粋

#### 各学年の就学者数 ネパール全体 1997 年度



(社)日本ネパール協会第 26 回ネパール研究会 ネパールのカースト/エスニック・グループとその教育問題  
神戸大学大学院(社)日本ネパール協会理事 畠 博之 より抜粋

教育課程は、ネパールで、5-3-2 制として、1951 年に始めての「学校改革」が制定された。次に、1971 年の NESP では、それまでの 5-3-2 制を改めて 3-4-2 制に変更された。カリキュラムの変更は約 10 年ごとに行われるが、学校制度も 1981 年には 5-2-3 制に、そして 1993 年には小学校 5 年間、中学校 3 年間、高校 2 年間、10+2(テンプラス・ツー)と呼ばれる後期中学校 2 年間に改編されている。高校(10 年生)を終了した生徒を対象に「School Leaving Certificate」(以下 SLC) と呼ばれる全国共通卒業認定試験が全国一斉に行われる。SLC が重要なのは、大学への進学は SLC 合格が絶対条件で、SLC の成績により行ける学校が決まるという事、SLC 合格者は大学を卒業しなくても小学校の教師になれる事、企業への就職は SLC 合格が条件である事による。ネパールでは、仕事が無く就職難である為、SLC 合格を絶対視する風潮がある。

SLC 合格の後 Campus の最初の 2 年、Intermediate は教養学科(Art)、商業学科(Commerce)、科学学科(Science)に分かれる。この 2 年間で修了すれば、学士号の Bachelor の過程に進める。

Technical College の場合は Medicine (医学、看護学など医学関係の勉強) と Engineering (工学) がある。学士過程修了後は 2 年間の修士号に進めます。

この次は博士号ですが、すべての学問で博士課程が用意されているわけではないので、その場合はインドや他の国に行くしかありません。

ネパールでは1959年に創立されたTribhuvan Universityが1980年代まで国内唯一の総合大学であった。ネパールには現在全部で6つの国立総合大学が存在する。トリブヴァン大学 (1959年創立)、マヘンドラサンスクリット大学 (1991年創立)、カトマンズ大学 (1991年創立)、プルワンシャル大学 (1997年創立)、ポカラ大学 (1998年創立)、BPコイララ健康科学大学 (1994年創立) である。その他、私立単科大学、技術専門学校、英語学校など、プライベートの学校は近年大幅に増加している。基本的に私立の単科大学は国立の総合大学に単位の認定を行ってもらう。

現在の学生は進学する場合は殆どがネパール国内の大学で、その他に米、英、インド、バングラデシュ、日本、パキスタン等に進学している。国外進学者数は年間 2,000~2,500 名。

## ネパールの保健医療事情と教育

ネパールの保健医療は、WHO、世界銀行が中心となった 20 年計画に基づき運営され、これら保健サービスに対する支出は国家予算の 1.4%(/GDP,2002 年)程度に留まっている。

保健大臣の諮問機関としてネパール医学協議会、看護協議会、医学研究協議会などがあり、機能と質の維持向上を監視している。医療政策・計画・外国援助・監視局 (PPFAMD) が国の医療政策を立てているが、予算の大半を ODA で賄っているためドナーの意見に左右されやすく、方針が一貫しないところが問題である。また医療サービス部の中にも企画・外国援助部があり、医療政策の指導性に欠けるところがある。

民主化後、ネパール国内での NGO 団体設立手続きが簡易になったことや、世界的に NGO の活動が活発になってきたことから、外国援助や NGO 援助による私立医科大学 (College) が 1993 年以降多く設立され、2000 年現在 10 校を数える。その他の技術学校も増加し、ネパール医学協議会では質の低下を懸念し、カリキュラム、実習病院などを確認し、私立大学は総合国立大学の認定下に位置づけている。

今回我々が訪問した Nepal Medical College は Kathmanzu University の認定下にある。私立大学の学生は幼稚園から私立で英語を勉強している場合が多く、医師、看護師は卒業後はアメリカなど海外に職あるいは博士 (PhD) を求める学生が約半数であるとのことである。

### 医師資格

現在ネパール医学協議会に登録されている医師の 49%がインドの免許で、ロシアの免許が次いで多く

19%、ネパールの医師免許所有者はまだ 16%である。その他にバングラデシュ、パキスタン、中国、イギリスなどである。

1973 年から一般医を養成するシステムができたが、教育年限の関係からインド医学協議会では医師とは認めていなかった。1978 年日本が協力して国立トリブバン大学に医学部を作り、毎年 40 名の新しい医師 (MBBS) が誕生するようになった。中学教育修了資格試験 (School Leaving Certificate: SLC) 合格後 2 年の高等化学コース、1 年の医学部進学コース、4 年半の医学部カリキュラムを修了し、医師仮登録後 1 年のインターンを経て MBBS 取得ができる。しかしこれも当初インド等はネパールの医師免許を認めなかったが、1994 年 Intermediate Science Course (ISC)、その後の Premedical Course を義務付けてから認められるようになった。またこの年に 1973 年以來の一般医制度を廃止して医師の教育制度はここに 1 本化された。実地経験 1~2 年の後この上に大学院を設置し、総合医、内科、小児科、心臓外科、麻酔科、産婦人科、病理、耳鼻咽喉科、精神科、整形外科、放射線科の専門医 MD コースができた、それぞれ 3 年のコースである。

## 看護師資格

旧制度と新制度が併行している。新制度の看護師(SN)は SLC 合格後 2 年の教養(ISC)および 4 年の専門コース（新制度）であるが、旧制度では、SLC 合格後 3 年の専門コースで Certificate、その後 3 年の実地経験と 2 年の専門コースで Bachelor、さらに 2 年の実地経験と 2 年の専門コースで Master in Nursing (MN) となる。

補助看護・助産師(Auxiliary Nurse-Midwife: ANM)は日本とは逆に看護師より教育課程は短く低い。

SLC 合格後 1 年半の専門コース、または高校卒業(10 年)後 2 年半の専門コース。旧制度では、中学校(8 年)卒業後 2 年の専門コースがある。主に出身地採用になる。

伝統的助産師 (TBA) とは、実際は伝統とは関係なく見習い経験のみで家庭分娩を介助している。現

在は郡保健所レベルの 2 週間研修修了で郡保健所に登録、その後年 2 回のリフレッシュ研修がある。

## 検査技師資格

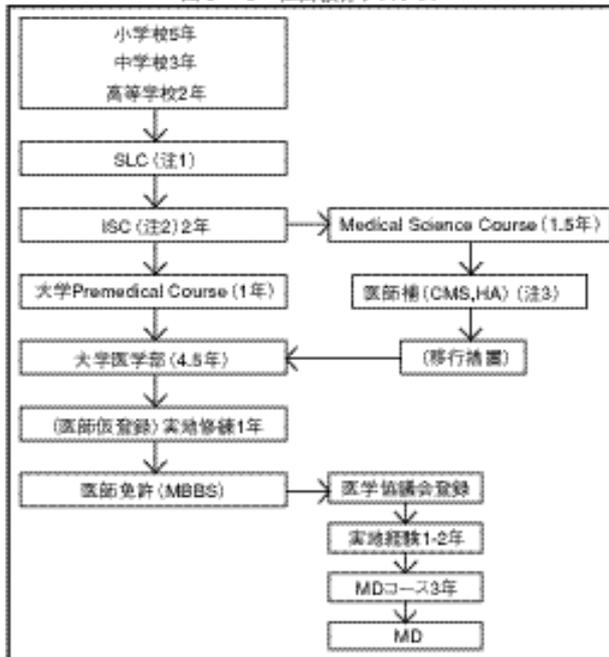
ラボアシスタントは SLC 合格後 1 年半の養成コースを受ける。

ラボテクニシャンは CTEBT(Council for Technical Education & Vocational Training)所管の学校で 3 年間学ぶ。さらに 2 年の研修で大学卒業資格となり Medical Technologist となる。シニア Medical Technologist として、さらに 2 年の修士コースがある。生理検査については検査技師は携わらない。

## その他

ダミ/ジャンクリといわれている呪術医(Traditional Healer: TH)はネパールでは医師の 80 倍の人数がおり、しかもどんな僻地にも住み着いて人々のよろず相談とその解決のための儀式を行っている。大昔からのもので、伝統的な民間療法でもあり、料金も安いことから西洋の医師がいないところでは活躍している。アユルベーダの大学もある。

図 6-3 医師教育システム



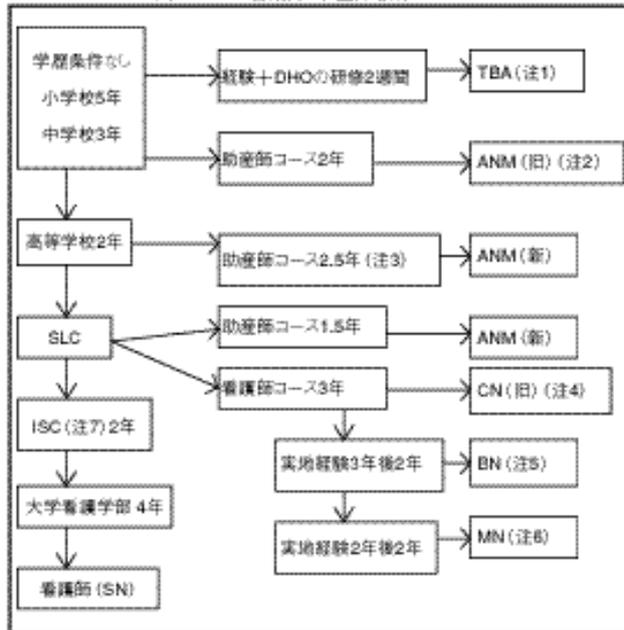
(注1) 医学部コースを受験できるのは SLC 第1ランク(トップ10%)のみ。

(注2) 諸外国の高卒相当の教育年数に合わせた。

(注3) CMS: Certificate in Medical Science、以前の職名はHealth Assistant (HA)、廃止になり医学部への移行措置がある。

出所: TUTH(1999) *Institute of Medicine Profile*、MOH (1999) *Health Information Bulletin* より作成。

図6-4 看護師・助産師教育システム

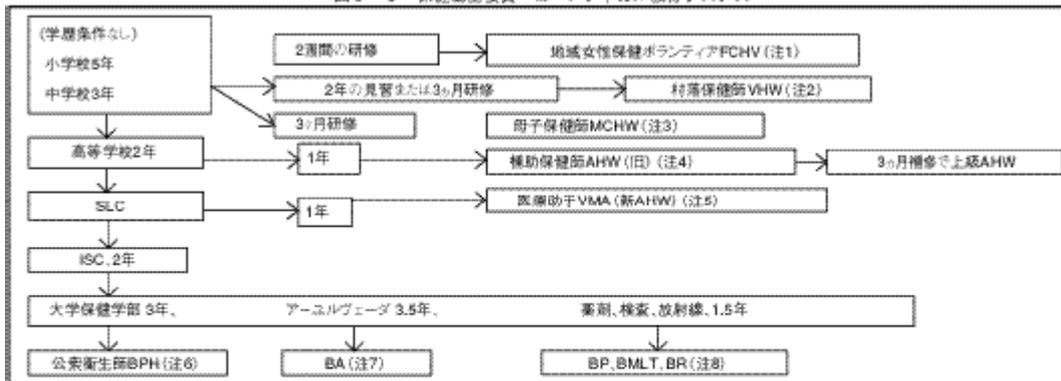


- (注1) TBA: Traditional Birth Attendant(伝統的助産師)、保健事業所の研修のみで、登録、年2回の再研修あり。  
 (注2) ANM: Auxiliary Nurse-Midwife(補助看護・助産師)、旧制度と新制度あり。  
 (注3) 高卒でSLC合格者でなかった者の助産師コース  
 (注4) CN: Certificate in Nurse  
 (注5) BN: Bachelor in Nurse  
 (注6) MN: Master in Nurse  
 (注7) 語外圏の高卒相当の教育年限に合わせた。

出所: TUTH(1999) *The Profile of Institute of Medicine* DHS/MOH(1999) *Annual Report*, MOH *Health Information Bulletin*より作成。

ネパール国別援助研究会報告書 第6章 倉辻 忠俊 より抜粋

図6-5 保健衛生要員・コ・メディカル教育システム



- (注1) FCHV: Female Community Health Volunteer  
 (注2) VHW: Village Health Worker, 主に予防接種を行う。  
 (注3) MCHW: Maternal and Child Health Worker, サブ・ヘルス・ポスト職制  
 (注4) ヘルス・ポスト、サブ・ヘルス・ポスト職制  
 (注5) 上級AIHWになるとヘルス・ポストの所長になれる。  
 (注6) BPH: Bachelor in Public Health, さらにMasterコースがあり、保健事業所所長になれる。  
 (注7) BA: Bachelor in Ayurveda  
 (注8) BP, BMLT, BR: Bachelor in Pharmacy, in Medical Laboratory Technology, in Radiology, この他に高卒で1~2年のそれぞれの専門学校があり、検査助手などになる。

出所: TUTH(1999) *Institute of Medicine Profile*、CTEVT(1999) *School for Health Science*, MOE(1998) *Documents of Paramedical's Association of Nepal*より作成。

ネパール国別援助研究会報告書 第6章 倉辻 忠俊 より抜粋

